

緒言

鈴木 真

個人的な感想で話を始めて申し訳ないが、哲学・倫理学を専門とする私にとって昨年ちょっとショックだったことがある。それは、道德に関する実証的心理学研究の一線で活躍する研究者二人が共にもともと哲学・倫理学を学んでいてそれから現在の分野に転向したと（遅ればせながら）気づいたことだった。トロリー問題等を課題としたfMRI研究から道德判断の二過程モデルを提唱しているJoshua Greeneは、プリンストン大学哲学科に博士論文を提出している（Greene 2002）。道德心理学と幸福（と不幸）の心理学の研究で有名なJonathan Haidtも、学部時代は哲学専攻だった。彼がこの経験と現代哲学について語っている次の箇所を読んだとき、私は頷きながらも苦い笑いを禁じ得なかった。

だが生の意味への関心は続いたので、大学では哲学を専攻したのだが、答えはほとんど見つからなかった。現代の哲学者はことばの意味を分析することを専門とし、（そもそも私にその問題を引き起こした）実存主義者はさておき、生の意味についてはほとんど述べていない。心理学の大学院に入ってはじめて、現代哲学がなぜ不毛に思えたのかがわかった。人類の本質に関する深い理解に欠けていたのだ。この本でも示してきたように、古代の哲学者はしばしば優秀な心理学者でもあったのだが、現代哲学は論理と合理性の研究に没頭してゆき、だんだんと心理学に対する関心を失い、情熱的で状況に埋め込まれた人生の本質に触れることがなくなっていった。「生の意味」を、抽象的に、あるいは一般的に、あるいは何らかの神話的で完全に合理的な存在にとってのものとして、分析することは不可能である。たまたま複雑な心と情動的なアーキテクチャを持つ私たちが実際にどのような存在であるかを知らなければ、何を持って意味のある生とするのかを問い始めることすらできない。（名誉のために言うておくが、近年において哲学は、より心理学的で情熱的なものとなってきた。）（Haidt 2006, p. 215. 邦訳, pp. 309-310を参照したが、一部訳を変えたところがある）

哲学のバックグラウンドを持つことから予想されるように、HaidtやGreeneの実証研究は哲

学的問題と関連が深く、心理学だけでなく哲学でも大きな反響を引き起こしている⁽¹⁾。このことにも例示されるように、近年、道徳という事象の背後にある心理に対する実証研究は、単に盛んになってきたというだけでなく、哲学・倫理学の関心に近いところで行われている。80年代の頃までの道徳の実証研究といえば道徳的発達段階研究であり、これは哲学・倫理学者の興味とはあまり近くなかった。しかし、現在の心理学研究の多くは、道徳判断の心理・脳神経学的過程や情動・直観との関係の話題など、一部の哲学・倫理学者の研究領域と重なることをしている。また哲学・倫理学の研究者の一部も、Haidtが不毛だと感じた言語・概念の分析への専心から脱却して、「たまたま複雑な心と情動的なアーキテクチャを持つ私たち」（と他の生物）についての深い経験的理解に基づいて、道徳判断の理論を構築しようとしている。ここには学際的な議論と共同研究の余地があり、実際欧米、特に米国では道徳心理学における心理学と哲学の相互交流が進んできている。

この現状を踏まえて、本号の『社会と倫理』では、道徳判断に関する心理学と哲学・倫理学における研究の現状について特集することにした。社会心理学における道徳判断研究、進化・発達心理学における道徳判断研究（特に青年期研究）、哲学・倫理学における道徳判断研究をそれぞれ一本の論文でカバーする形で論文を掲載している。この計3本の論文の各々は、各分野の専門の研究者が執筆している。本特集の狙いに鑑みて、二名の査読者のうち一名の方には、専門的に適切な論文となっているかという基準だけではなく、専門外の人間にも理解ができ意義がわかるようになっていくかどうかという基準も適用して査読していただいた。

ここで、おせっかいだとは思いますが、以下の三本の論文を読む際に注意が点とされると思われる点を指摘しておきたい。まず、心理学においても哲学においても「道徳判断研究」という題目やまとまりを意識して研究が行われているわけでは必ずしもない、ということである。たとえば、標準的な社会心理学の教科書に道徳判断に関する章が設けられることは、ほとんど皆無だという（唐沢論文、p. 86）。哲学・倫理学でも、道徳判断について研究している人々は、自分たちをメタ倫理学とか道徳心理学をやっているのだとみなしており、道徳判断研究者だとみなしているわけではない。そこで、掲載された各論文は明確なまとまりのない分野を執筆者の視点で切り取るという難儀な作業を経たものとなっている。次に、このことも（字数の制約とともに）関連して、各分野の道徳判断に関連する研究でも、論文でカバーされていない部分がある。たとえば、哲学・倫理学における道徳判断研究についての私の論考では、道徳判断の本性的問題に焦点を当てたために、道徳判断（能力）の進化的・文化的起源⁽²⁾、道徳判断の実験哲学研

(1) Greeneと哲学者たちの論争については、たとえば、Sinnott-Armstrong 2008, Vol. 3, Ch. 2やBerker 2009を参照。Haidtと哲学者たちの論争については、たとえば、Sinnott-Armstrong 2008, Vol. 2, Ch. 4や、Suhler & Churchland 2011とHaidt & Joseph 2011の応答や、Flanagan & Williams 2010を参照。

(2) たとえば、鈴木論文の文献表に挙げられているMachery & Mallon 2010, Joyce 2006や、内井 1996を参照。

究⁽³⁾、道徳判断と想像や反事実的思考との関係⁽⁴⁾、道徳判断と教育の関係⁽⁵⁾といった、道徳判断の偶然的性質についての哲学研究が解説されていない。最後に、「道徳判断」や「相対主義」などの専門用語には分野によって使い方に違いがあり、それは三つの論文にも一特に、唐沢論文・高橋論文と鈴木論文の間では一現れている。編集部としては用語法を統一するよう求めることはしていないが、査読者の方が必要な場合には意味を説明するよう執筆者に求められたので、専門外の方にも一応理解できるようにはなっているだろう。各分野における概念とその背後にある関心の違いを知ることも相互理解と共同研究のために意義のあることだと思うので、少し注意しながら読んでいただければ幸いである。

現在の心理学系の研究と哲学系の研究は関係するところが多いにもかかわらず、両方の議論状況をきちんと踏まえた研究が特に日本ではそれほど出てきていないようにみえる。将来的にこうした方向の研究が盛んになっていくように、という願いがこの特集には込められている。全体として、この特集を読むと道徳判断研究の議論状況、各分野の概念や関心や方法論、そして相互の関連や統合と進歩の見込みが明らかになり、学際的交流の進展の一助となるとよいと思う。

文献

- Berker, S. (2009) "The Normative Insignificance of Neuroethics." *Philosophy & Public Affairs* 90: 188-209.
- Flanagan, O. & Williams, A. R. (2010) "What Does the Modularity of the Morals Have to Do with Ethics? Four Moral Spouts Plus or Minus a Few." *Topics in Cognitive Science* 2 (3): 430-453.
- Gendler T. (2011) "Imagination." *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (以下、SEPと略記) (Fall 2011 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <http://plato.stanford.edu/archives/fall2011/entries/imagination/>.
- Greene, J. D. (2002). *The Terrible, Horrible, No Good, Very Bad Truth About Morality and What To Do About It*. Department of Philosophy, Princeton University. (advised by David Lewis and Gilbert Harman) .
- Haidt, J. (2006). *The Happiness Hypothesis: Finding Modern Truth in Ancient Wisdom*. Basic Books. 邦訳：藤澤隆史・藤澤玲子訳 (2011) 『しあわせ仮説：古代の知恵と現代科学の知恵』 新曜社.
- Haidt, J. & Joseph, C. (2011) "How Moral Foundations Theory Succeeded in Building on Sand: A Response to Suhler and Churchland." *Journal of Cognitive Neuroscience* 23 (9): 2117-2122.
- Noddings, N. (1984) *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education*. University of California Press.
- Sinnott-Armstrong, W. ed. (2008) *Moral Psychology* Vol. 1-3. MIT Press.
- Suhler, C. & Churchland, P. S. (2011) "Can Innate, Modular 'Foundations' Explain Morality? Challenges for Haidt's Moral Foundations Theory." *Journal of Cognitive Neuroscience* 23 (9): 2103-2016.
- Superson, A. (2012) "Feminist Moral Psychology." *SEP* (Fall 2012 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <http://plato.stanford.edu/archives/fall2012/entries/feminism-moralpsych/>.

(3) たとえば、鈴木論文の文献表に挙げられている Schwitzgebel & Cushman 2012, Knobe 2007 を参照。

(4) Gendler 2011, Section 4.1 で引用されている文献を参照。

(5) たとえば、Noddings 1984 を参照。ちなみに、Noddings 1984 が一例となっているようなフェミニスト的観点からの（哲学的）道徳心理学については、Superson 2012 とその引用文献を参照。

内井惣七 (1996) 『進化論と倫理』世界思想社.